メディアラ［京都から世界へ］
メディア・グラフィック
http://www.kyoto-media-arts-lab.jp/

東日本巨大地震の記憶

MediaLa

KYOTO Media Arts Lab. Information

No. 1

JAPAN 3.11
Special Issue
April.2011

千年に一度といわれる巨大地震が
日本の東北・三陸地方を襲った。
自然の驚異の前で全く為す術がない人間。
揺れる大地、盛り上がる海に引きずり込まれ
飲み込まれていった二千十一年の日本。
科学文明を誇ってきた人類の叡智など
何の役にも立たなかった。
「生きる」という壮絶なドラマは
こんなにも過酷な試練を与えるのか。
絶望を乗り超えて明日へ

暴虐の風景

◎東北巨大地震の爪痕

JAPAN 3.11
Kyoto Media Arts Lab.
Special Issue
April.2011

「暴虐の風景」

◉写真・吉川譲 Photo by Yuzuru Yoshikawa / Miyagi-Kesennuma

3月11日の巨大津波とその後の火災で、まるで戦場の焼け野原と化した宮城県気仙沼。

JAPAN 3.11
Kyoto Media Arts Lab.
Special Issue
April.2011

Photo by Yuzuru Yoshikawa / Miyagi-Kesennuma

津波が火を噴き、人間を屠る。
暴虐の風景。

「暴虐の風景」

3 月 15 日未明、気仙沼市に入った。
ヘッドライトが照らす道の両脇には重機が力任せに積み上げた瓦礫の山が連なり、
被災現場に着いたことを実感する。
地震直後に発生した大火災は未だ鎮火せず、
避難所のある高台には街を焼き尽くす炎を見つめる人々の姿があった。
そんな人たちの心を射ぬくかのように、時折パーンパーンと銃声のような破裂音が響く。
やがて朝の光が炎の色を薄めてゆき、
地震と津波が創り上げた暴虐の景色を浮かび上がらせた。

吉川譲

吉川　譲 (よしかわ ゆずる) : プロフィール / 報道写真家。関西大学経済学部卒業後、斎藤康一氏に師事。７０年、フリーとなり広告写真に携わる。元「フォーカス」専属カメラマン。現在、「週刊新潮」専属報道写真家として活躍する。関西で活躍中のアーティストや京都・狂言師茂山家の人々を取材するなど、多彩に活躍する。日本写真家協会会員。

JAPAN 3.11
Kyoto Media Arts Lab.
Special Issue
April.2011

Photo by Yuzuru Yoshikawa / Miyagi-Kesennuma

為す術もない
巨大津波の傍若無人。
覚めない悪夢。

【東日本大震災】の記憶
◉2011 年（平成 23 年）3 月 11 日 14 時 46 分 18 秒・地震発生

2011 年（平成 23 年）3 月 11 日 14 時 46 分 18 秒に、日本の三陸沖（牡鹿半島の東南東約 130km 付近）の深さ約 24km（暫定値）で発生したマグニチュード (Mw) 9.0（暫定値）の西北西 - 東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型、太平洋プレートと北アメリカプレート境界域（日本海溝付近）における海溝型地震である。この M9.0 という地震の規模は、1923 年（大正 12 年）の関東地震（関東大震災）の M7.9 や 1994 年（平成 6 年）の北海道東方沖地震の M8.2 を上回る日本国内観測史上最大、アメリカ地質調査所 (USGS) の情報によれば 1900 年以降、世界第 4 位の巨大地震となった。
この地震では、本震および余震による建造物の倒壊・地すべり・液状化現象・地盤沈下などの直接的な被害のほか、津波、火災、そして、福島第一原子力発電所事故に伴う放射性物質漏れや大規模停電などが発生し、東北地方を中心とした甚大な一次被害のみならず、日本全国および世界に経済的な二次被害をもたらしている。

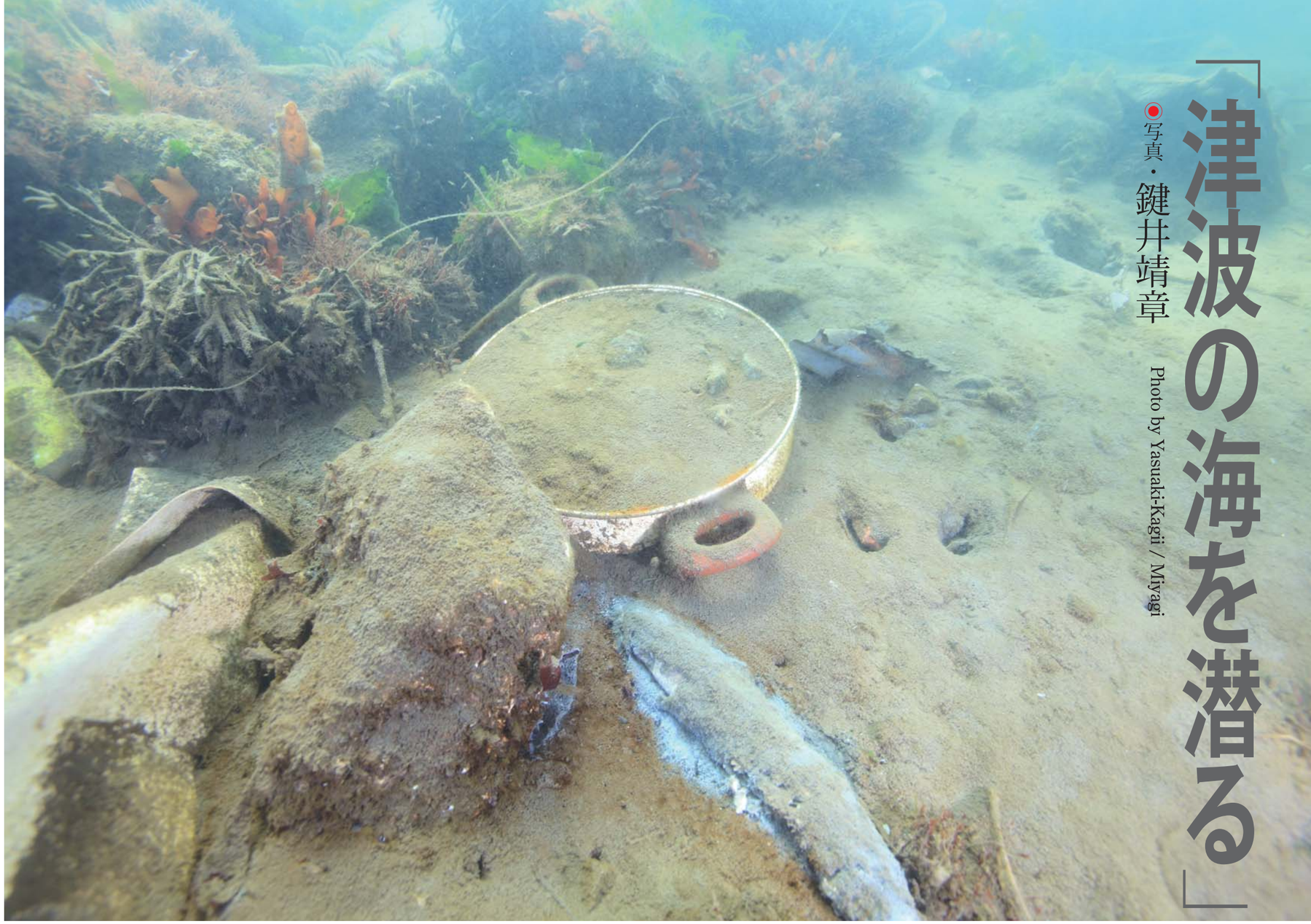
「東日本大震災」と命名された当地震による国内の被害は、地震そのものによる被害に加えて津波・火災・液状化現象・福島第一原子力発電所事故・大規模停電など多岐に渡り、1 都 9 県が災害救助法の適用を受けた。警察庁発表による死者及び届出があった行方不明者の数は合わせて 2 万人を超えており、津波被害を受けた東北地方の太平洋沿岸を中心に関東地方や北海道でも死傷者が出る事態となっている。日本災害史におけるこの死者・行方不明者数は関東大震災の 10 万 5,385 人に次ぐものであり、阪神・淡路大震災の 6,437 人を優に超え、戦後最悪の自然災害となってしまった。
＜出典：wikipedia・東北地方太平洋沖地震＞

JAPAN 3.11
Kyoto Media Arts Lab.
Special Issue
April.2011

「津波の海を潜る」

◉写真・鍵井靖章

Photo by Yasuaki-Kagii / Miyagi



「海中に沈んだ命と時間を探しに」

４月３～５日に講談社「週刊現代」編集部より取材の依頼があり、東北・岩手に向かった。依頼内容は被災地での水中撮影。被災地の陸上の様子は、連日の報道などで知られている。しかし、「海の中はいったいどうなっているのか？」というものだった。

最初の２日間は、八戸に近い北三陸地方の八木南港からチャーターした漁船で出港し、久慈市や水沢の手前、小本 (おもと) 川脇の切り立った崖下で潜った。この辺りでは漂流した転覆船の下などで撮影した。頭上は行方不明者一斉捜索中の自衛隊のヘリが飛び、海中では、ピーン、ピーンとソナーのような音が海中一面に響き渡っていた。水温は 6.5 度、正直、寒さは全く感じなかった。

２日目は、港湾整備が進む宮古湾を中心に潜った。大きな作業船が往来している湾内では大きながれきはもうほとんど見られなかった。防波堤沿いを潜っていると、イスや金庫、オフィスで使用されるような機器が海底に散在していた。昭和天皇の写真もそこで見つけた。今回、全ダイブのサポートをお願いした神奈川・葉山ＮＡＮＡのオーナーガイドの佐藤輝氏が、東北の海で人気の高いダンゴウオを見つけてくれた。ダンゴウオの大きさは、人差し指の爪くらいだ。撮影していると、鉄板の上に移動し、大きく口を開けた。瓦礫の海底から、何かメッセージを発信しているようだった。

３日目は、大船渡で潜水撮影を行った。赤崎地区の防波堤沿いに、民家がそのまま海底に引きずり込まれていた。注意を払い、玄関からお邪魔した。押入れには布団が並び、リビングにはソファが浮いていた。閉塞感のある空間の中で、意識をしっかり集中させないと、前後、左右、上下の感覚を失いそうになる。撮影日は、お天気が良く、海中にも光が差し込んでいた。目の前の惨状とその明るい光が、対照的だった。家の周囲の海底でも、電子ピアノなど楽器、食器、カバンなどが残っていた。

この国に生きる者として、少しでも長期的な復興に携わる責任を感じている。水中写真家として、できることは何か？今後は、東北、三陸の海の状況や生き物などの撮影を続け、復興の役に立ちたいと思っている。

鍵井靖章

鍵井靖章（かぎいやすあき）・プロフィール　：１９７１年、兵庫県生まれ。
大学在学中に水中写真家・伊藤勝敏氏に師事し、水中写真家を志す。当時の名刺の肩書きは、「凄い弟子」。1993 年よりオーストラリア、伊豆、モルディブに拠点を移し、水中撮影に励む。1998 年に帰国。フリーランスフォトグラファーとして独立。撮影スタイルは、自然のリズムに寄り添い、出来るだけ生き物にストレスを与えないように心掛けている。約 20 年間、海の生き物に、出会い、ふられ、恋して、無視され、繋がり、勇気をもらい、そして、子育ての方法などを教えてもらいながら、撮影を続けている。
第 15 回アニマ賞受賞（平凡社）、2003 年日本写真協会新人賞受賞など受賞歴は多数。2008 年にはイギリスで大型の写真集「Ｄｅｅｐ　Ｂｌｕｅ」を上梓。アメリア、オーストラリア、イタリア、インドでも出版されている。今年の 6 月に国内初の写真集「アシカ日和」（マガジンハウス刊）を出版予定。

（写真上）大船渡湾内では、津波でかき回された泥が海底一面に覆い被さり息苦しそうに感じる。死んだ魚は腐爛して白くカビが生えたように横たわる。普通の海なら死ねばたちまち他の生きものの餌食になって、腐る間もなく分解される。しかし、今は泳ぎ回る魚たちの姿が見えない。人間だけでなく数え切れないほど多くの生きものたちが犠牲になったに違いない。

（写真左奥）大船渡港の対岸にある赤崎町で沈んでいた小学生のランドセル。ヒトデが校章のようにへばりついていた。
（写真左）無惨に引きちぎられた姿で沈むアップライトピアノ。近くにはシンバルセットも埋もれていた。大船渡湾で。

JAPAN 3.11
Kyoto Media Arts Lab.
Special Issue
April.2011

Photo by Yasuaki-Kagii / Sanriku

宮古港の防波堤の下に沈む御影石に付着していたヒトデ。
崩壊したのであろう御影石にも生新しい削れて欠けた傷跡が見える。

ヒトデが
居てくれる。
生きてて良かった。

ダンゴウオ

ウニ

三陸を襲った津波は、海底がむきだしになるほどの引き波のあと、
振り向いて町を飲み込んだ。
人々は海が膨らんだと表現した。
そして黒い海、黒い津波が襲いかかってきた。
１ヶ月経って海を覗いた。
人差し指のツメぐらい小さな体のダンゴウオに出会った。
生きていてくれた。
ウニもヒトデもいた。
とにかく海中で命とであった事がうれしい。
どんな命も次につながって欲しい。
みんな生き延びて欲しい。

今回の撮影は、水中に残る家屋や日常生活用品などの撮影と並行して、生き物の捜索と撮影を行った。これは、生き物を撮影する水中写真家としての私なりの目標と使命だった。こんな状況の中でも、きっとお魚たちに会える。被災した状況の中でも、海の生き物たちはしっかりと生きている。ということも報道したかった。海の中は、みんなが覗ける世界ではないので、どうしても全ての事情の受け皿になることが多い。これ以上、陸上のつけが回ったり、汚される前に、生き物たちはちゃんと生きているということを証明しておきたかった。

宮古港に沈んでいた木に挟まっていた昭和天皇の写真。
持ち主が大切にしていたのであろう、写真にはパウチ加工がしてあった。

◎産経新聞社提供 / 産経フォト
（http://photo.sankei.jp.msn.com/）で産経新聞取材の
東日本大震災関連の写真が見られます。

「兄さんへ」 連絡の取れない兄を訪ね実家を訪ねたが会えず、やむなく張り紙を残し立ち去る女性。
３月１６日午前、岩手県大船渡市

「瓦礫の中で見つけた優しさ」

大津波に襲われ壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市で、記憶にあるにおいを感じた。土と海水が混ざり蒸した泥のにおい。２００４年１２月に発生したインド洋大津波の被災地・インドネシアで嗅いだにおいだ。

そして、あの時と同じ光景が眼前に広がっていた。行方の知れない家族を捜し瓦礫の中をさまよい歩く人たち。自宅跡で立ち尽くす人。道端に並べられた遺体のそばでは、目印のために棒の先に付けられた赤い布が風に揺れていた。何もかもが同じだった。

もう生涯、見ることはないと思っていた光景。よみがえった記憶。気がつくと涙があふれていた。

まもなく震災から一カ月をむかえようとしていた瓦礫の町で大平勝子さん（７２歳）という被災者に出会った。両側に瓦礫の積み上がる道を、しっかりと前を見据えて歩く姿に惹かれて何枚もシャッターを切った。背中には衣類が詰まった風呂敷包みを背負っていた。

カメラに気がつくと立ち止まり、はにかんだように笑った。二言三言、会話して笑顔をほめると「でもね、息子が津波で死んだのよ」とぽつりと言った。掛ける言葉を失った。「体に気をつけて」そう言うのがやっとの私に「あなたも気をつけてね。がんばって」と逆に励ましの言葉をくれた。そうして、大平さんは再び瓦礫の中を黙々と歩いて行った。

姿が見えなくなるまで見送った。私はこの人を決して忘れない。つらい現実の中であっても微笑みを忘れず、他人を気遣う優しさを持ったこの人を。被災地にはそんな優しさがたくさんあるということを、これからも伝えていきたい。

頼光和弘

頼光和弘（よりみつ かずひろ）プロフィール： 産経新聞カメラマン　大阪本社　写真報道局勤務。 三宅島噴火、新潟中越地震やインドネシア・スマトラ島沖地震・インド洋大津波、戦後イラクなど国内外の被災地を多数取材。被災地に生きる人たちにスポットをあてた取材を心がけている。

「ほほえみ」 被災した自宅から運び出した着替えを入れた風呂敷包みを背負って、避難先の親戚宅に向かい歩く大平勝子さん（７２歳）は息子を津波で亡くしたという。前を見据え、しっかりとした足取りで瓦礫の町を歩いていた。カメラに気づくと照れながら微笑んでくれた。４月８日午後、岩手県大船渡市

これから、まだ
何を
背負えというのか。

「微笑みの記憶」

◉写真・頼光和弘　Photo by Kazuhiro-Yorimitsu / Miyagi,Iwate

「宝物見つけた」 重機を使った瓦礫の撤去作業中にアルバムを見つけたため、一旦作業を中断しアルバムの泥を払い保管する作業員。重機を使った作業でも細心の注意が払われている。
４月１３日午後、宮城県気仙沼市

JAPAN 3.11
Kyoto Media Arts Lab.
Special Issue
April.2011

Photo by Kazuhiro-Yorimitsu / Miyagi,Iwate

「お父さん、お父さんっ」

「迎えに来たよ」

行方不明となっている夫の職場に向かい「お父さん、お父さん」と何度も呼びかける三浦ひろみさん（51歳）。
夫の毅さんは宮城県南三陸町の危機管理課長補佐を務めていた。
津波発生時は同町の防災対策庁舎にいて、防災無線で町民に対し最後まで避難を呼びかけるアナウンスをしていたという。
地震発生から一カ月を迎え
「まだ、夫が仕事をしているような気がして・・・。迎えに来ました」と話した。
黙祷しながら
「最後まで仕事してくれてありがとう」と伝えたという。

4月11日午後、宮城県・南三陸町

「記念写真」津波発生時、防災無線で最後まで住民に避難を呼びかけたまま行方不明となった宮城県南三陸町・危機管理課長補佐の三浦毅さん。妻のひろみさんと撮ったこの写真は昨年の結婚記念日に撮影したもの。ひろみさんは毅さんの声を聞きながら高台に逃げたという。津波は幸せな家族の日常を一瞬にして奪い去った。（提供写真）

International Message for JAPAN

JAPAN 3.11
Special Issue
April.2011
KYOTO Media Arts Lab.

1000 年に一度といわれるほどの大地震に襲われ、
津波と原発の事故で日本全体が未曾有の経験を余儀なくされている。
また日本だけでなく、世界を巻き込んで様々な分野で影響が出始めている。
そのような中、私たち京都メディア・アート・ラボの海外メンバーである
映画監督たちからもお見舞いのメッセージが寄せられた。
またこの動きを受け、ビデオメッセージだけではなく、
海外とスカイプで交信し、生の声でディスカッションを行った。
さらに、宮城県へ取材に行ったカメラマンを招き、
現地で取材された写真を紹介する講演会も同時に開催された。

Don't give up, Japan
Don't give up, Tohoku

Video Letter from FRANCE

ユチャーラ・ゼンジルジさん —Çagla Zencirci
ギヨーム・ジョヴァネッティさん—Guillaume Giovanetti
■ 映画監督

C：あの朝 目が覚めて携帯を開いてみたの。
そしたら、家族や友達から 15 通ほどのメッセージが入っていたわ。
何人かは「まだ日本にいるの？」と聞いていたし、
他は「何が起きているの？ 日本に電話して！」と言っていたの。
こうして私たちは地震の事を知ったの。
最初の 1 時間くらいは誰にも電話が出来なくて、
何が起きているのかを知るのにネットにくぎ付けになっていたの。
地震の規模など正確な情報を得るのに必死だったわ。
正直 ネットの画像や動画などには、一切目を向けることが出来なかったの。
G：あまりにも辛すぎた。
C：そう 余りにも辛い事だったわ。
でも 最初に思った事は私たちは日本人を信じているということ。
特に規律や習性について。
「地震が来ても日本人は仕事をするし、パニックも起こしていないね」という人もいたわ。
私たちは日本の文化がこういった事態でも、
パニックが起きないように構築されている事を知ってたわ。
皆は、こんな事態がフランスやトルコで起きたらどうなるかって話したけど、
きっと人々はお互いを踏みつけるようにパニックを起こし、
震災では無くパニックによる負傷者が多数出ると思う。
日本人の平静さと、こんな大惨事にもきちんと向き合える日本の文化を
私たちは改めて感動したし、敬服しています
G：そもそも、日本人だけがこの惨事を乗り越え復興することが可能だと思う。
もし、これがインドやフランスやトルコだったら大混乱になっている。
C：世界規模の大混乱になるわ。
C＆G：でも、日本人だけは絶対に乗り越えることができる。
G：日本に半年滞在した経験から、そう確信できるんだ。
なので この深刻な危機を絶対に日本人は乗り越える確信が、僕らにはあるんだ。

イギリスの街を歩いていて、見知らぬ人に声を掛けられた。
「あなた日本人？ あなたの家族は、大丈夫？
お友達は、大丈夫？」と。
世界のみんなが心配してくれているのだなあと
本当に嬉しかった。
・ワイアット恵さんより

Movie Message

▲「I am JAPAN」＜わたしは日本＞東北大地震と福島原発を憂いて送られてきた植松眞人監督の１分３０秒の短編映画。広島の原爆と原子力発電所の在り方を考えさせられる秀作。2011 年京都国際インディーズ映画祭で上映される。

Video Letter from FINLAND

ユッカ - ペッカ・ラクソさん —Jukka-Pekka Laakso
■ タンペレ映画祭ディレクター

日本のみなさん、こんにちは。
フィンランド、タンペレ映画祭の、ユッカ・ペッカ・ラクソです。
今回の災害は我々にとっても人ごとではありません。皆さん勇気を持ってください。
そして、早く現状が回復することを祈ってます。がんばってください。
私たちの思いは、常にあなた達と共にあります。

Skype Message from ENGLAND

Skype Message

イギリスからメッセージを送って頂いた
ワイアット恵さん
（CON-CAN ムービーフェスティバル・スタッフ）

▲イギリスとのスカイプ中継
イギリスでは「I ♥ 日本」のロゴマークがデザインされたポストカードを販売している

▲京都・遊子庵で行われたイギリスとのスカイプ中継。その様子は、ビデオ撮影され今後、海外との交流に活かされる。参加者たちは熱心に交信相手と質問や感想を話し合った。

がんばれ、日本。
がんばれ、東北。

▼下記は、スカイプ中継した方々です。ありがとうございました。
●ユッカ - ペッカ・ラクソさん（タンペレ映画祭ディレクター／フィンランド）
●ワイアット恵さん（CON-CAN ムービーフェスティバル・スタッフ／イギリス）
●クリス・フジワラさん（CON-CAN ムービーフェスティバル顧問・映画批評家／アメリカ／日本）
●平林勇さん（映画監督／日本）　＊海外通訳：谷元浩之さん（CON-CAN キュレーター）

1 面トップで日本に応援のメッセージを掲載した 3 月 13 日付の英紙インディペンデント・オン・サンデー。イギリス在住のワイアット恵さんから現物を送って頂いた。この新聞記事をみて感動した人が多くあった。

海外映画監督たちから
東日本大震災にお見舞いの声
スカイプで海外と TV 交信！
活発に意見交換

３月３１日、京都・遊子庵で、海外映画人たちとスカイプ中継がされた。主催者は、京都国際インディーズ映画祭を率いる京都メディア・アート・ラボ設立準備委員会が行った。
３月３１日に発生した東日本大地震を心配しての海外からの声に応えることと、福島原発のメルトダウンを心配して、日本のマスコミや政府発表と海外メディアの報道内容の違いについての検証も含めて活発な意見が交換された。交信相手は、イギリス、フランス、フィンランド、アメリカ、そして東京。
話の内容は、政府の大本営発表がいかに時代錯誤的なものであるか、など、情報発信についてや２４時間 Ustream や Twitter,You-tube で世界交信できる時代に、情報を隠しきれない時代になったことが証明された。世界の注目は、TUNAMI からすでに FUKUSHIMA に関心は移っている。国内でもいまだに手が出せないでいる放射能汚染の不安が解消されていない。科学文明を信奉してきた世界人類に強烈な課題が提示された。日本の非核三原則は、まやかしだったのか。経験が活かされない結果は、あまりにも悲惨で理不尽である。

We Might Be the Next Place

JAPAN 3.11 TOHOKU EARTHQUAKE

Kyoto Media Arts Lab.
Special Issue
April.2011

写真：頼光 和弘

「安置される遺体」 布が巻かれた棒が目印に立てられ安置される遺体。丁寧に布団や毛布がかけられた遺体は道路わきに数十メートル置きに安置され消防団員らが収容し搬送していた。
３月１６日午後、岩手県陸前高田市

地球誕生は、今から 38 億年前といわれている。人間の歴史など、たかだか数万年。今では人間は、我が物顔で地球を支配したかのように振る舞っている。しかし、我々は自分たちが棲む地球の事を何一つ分かっていないし、自然が与えてくれたモノのうち、何一つ創り出す事もできない。この度の東北大震災は、自然の驚異を見せつけられた。まるで為す術もなく目の前で、人間が築き上げた科学文明が、文化が飲み込まれ、破壊され、火の海の中で灰になっていった。大切にしていた掛け替えのない命も、財産も、思い出も、生活も容赦なくずたずたに引き裂かれてしまった。まるでギリシャ神話や聖書、古事記に書かれた終末の言葉のように。海は裂け、大地は割れ、怪物が火を噴く。古代から先人は、神話に託して自然の恐ろしさを知りなさい、自然に敬意を払いなさいと、教えてくれていたのだ。今では、まるであり得ないと思うような神話の世界も、その時代では精一杯の科学的表現だったに違いない。そのことを、いま誰が笑うことができるだろうか。自然と向き合いながら、地球人として、人間は、どう在るべきか。どう生きるべきか。私たちは、いまこそ何万年先の私たち人類の旅路の道しるべを正しく書き記しておかなければならない。――編集後記にかえて―― 京都メディア・アート・ラボ：広瀬之宏

Mediala
KYOTO Media Arts Lab. Information
No. 1
April.2011
メディアラ［京都から世界へ］
メディア・グラフィック

●発行日・平成23年4月1日 ●発行・京都メディア・アート・ラボ設立準備委員会 http://www.kyoto-media-arts-lab.jp
●編集・有限会社ハーディセカンド 〒542-0081 大阪市中央区南船場2-10-28 下村ビル404号
●協力：京都府・京都市＜京都府地域力再生プロジェクト支援事業＞

KYOTO Media Arts Lab.

JAPAN 3.11 TOHOKU EARTHQUAKE

Now, to Be

【いま、生きる】

KYOTO
Media
Arts Lab.

◉「メディアラ」特別編集版
東日本巨大地震の記憶／「暴虐の風景」

◎2011年4月1日・発行
◎発　行：京都メディア・アート・ラボ設立準備委員会
発行者：広瀬之宏
〒629-0151 京都府南丹市八木町南広瀬砂子 39-1
事務局：〒542-0081 大阪市中央区南船場 2-10-28 下村ビル 404 号
U）ハーディセカンド内／ TEL.06-6241-0522
◎デザイン・編集：U）ハーディセカンド／広瀬之宏＋川端一実
◎写　真：吉川譲＋鍵井靖章＋頼光和弘（産経新聞社 / 産経フォト）
◎印刷所：恒和プロダクト
◎出版協力：京都府・京都市＜京都府地域力再生プロジェクト支援事業＞
©Kyoto Mediala,Y-Hirose,Y-Yoshikawa,Y-Kagii,K-Yorimitsu
＊本紙掲載の写真および文章の無断転載を禁ず。著作権で保護されています。
＊本紙は非売品です。ご入り用の方は送料を添えて事務局にご連絡ください。